

森とカテドラル

— der RHEIN と la SEINE の間で — 19

ベルギーにおけるラ・テーヌ文化を代表する美術品に、マース川流域マーストリヒト近くのエイゲンビルゼン Eigenbilzen 出土の金板の透かし細工がある。角でできた杯の縁を飾っていたもので、植物模様が連続して打ち出されている（サンカントネール歴史博物館所蔵）。これと非常に良く似た透かし細工が、鉢を飾ったものとしてライン河とモーゼル川の間、ラインラント-プファルツ地方から出ている。ラインラント地方は、シャンパーニュ地方とならんでラ・テーヌ文化の中心地だった。二つの金細工は同時代（前 400 年頃）であり、エイゲンビルゼンはラ・テーヌ文化初期の北限であったと同時に、ケルトとゲルマンの接点であったとも考えられる。しかし、考古学と言語学の重ね合わせが非常に難しいことは常に指摘されている。

言語学者 H. クラーエ（1898～1965）によればゲルマン語とケルト語に限られた共通語として、森の聖所=礼拝堂 があるという。前者は古高地フランク語として、nimidas、後者はガリア語で神苑を原義とする nemeton という言葉になるという。ゲルマンもケルトも同じように森の中に聖地を持ち、同じような呼び方をしていたのだろう。他にもケルト語系の「預言者、詩人」が、ゲルマン語系の巫女や神の名、および詩人に繋がるという。ラ・テーヌ文化の広がりの中で、特別にケルトとゲルマンだけに共通の精神文化があったのだろうか。

ガリアのケルト文化がローマ文化の影に隠れてしまってから、ローマとゲルマンの違いが際立ち、ケルトとゲルマンの相似が見えにくくなったように思える。「鉄」を表す共通の語をもつことは、双方の接触が鉄器時代に属することを意味するとして、「森」や「馬」「革」の語の



森の礼拝堂

共通性や、「服の飾り」と「螺旋状に編んだ金属線」の類似の指摘は、他の民族とは異なるゲルマンとケルト固有の文化圏があったとも考えられる。

西ヨーロッパにキリスト教が入ったとき、ケルトはすでにローマ化していた。キリスト教がローマの国教になった頃、冬至を祝う習慣が取り込まれイエスの誕生日となった。太陽の誕生を祝う習慣はエジプトにもギリシャにもローマにもあったのだが、やがてキリスト教を受け入れるゲルマンの習慣でもあった。北の地域では太陽の再生はさらに大きな喜びだったろう。北欧のユル祭からゲルマンの古代信仰が推測されている。こうして降誕祭は復活祭と同じように重要なものとなっていった。

キリスト教がユダヤ教から離れ、ギリシャ語圏に広まる礎となった殉教者、聖ステファノの日が 12 月 26 日にあるが、これは降誕祭がこの時期に行われる以前からのことだろうと思われる。

冬至は光の再生を意味する。チルチルとミチルが「光」の導きにより自己の新生を得たのも、クリスマスのことだった。

画家 五味政明

フランドル古典絵画技法解説

来る 12 月 10 日（日曜）絵画技術の勉強をしている人々を対象に、フランドル古典絵画技法の解説を王立古典美術館にて行います。

つきましては、一般傍聴者を数名受け付けます。（無料）

聴講ご希望の方は FAX にてお申し込み下さい。02-657-9417 五味